平成 25 年 11 月 23 日（土）

大川遺跡（第４次調査）現地説明会資料

調査場所　舞鶴市字大川地先

調査期間　平成25年４月25日～平成26年２月中旬（予定）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3
URL http//www.kyotofu-maibun.or.jp

はじめに

大川遺跡は、河口から約９kmさかのぼった由良川左岸に形成された、縄文時代から近世までの集落遺跡です。現在、由良川下流部緊急水防災対策事業に関わる堤防工事に伴い発掘調査を実施しています。

周辺の遺跡の調査によって、この地域では古代より自然堤防上に人々が生活していたことがわかっています。上流の志高遺跡では、奈良時代の大型の掘立柱建物群等がみつかっています。さらに上流の桑飼上遺跡では、官衙関係の施設とみられる掘立柱建物群がみつかっています。

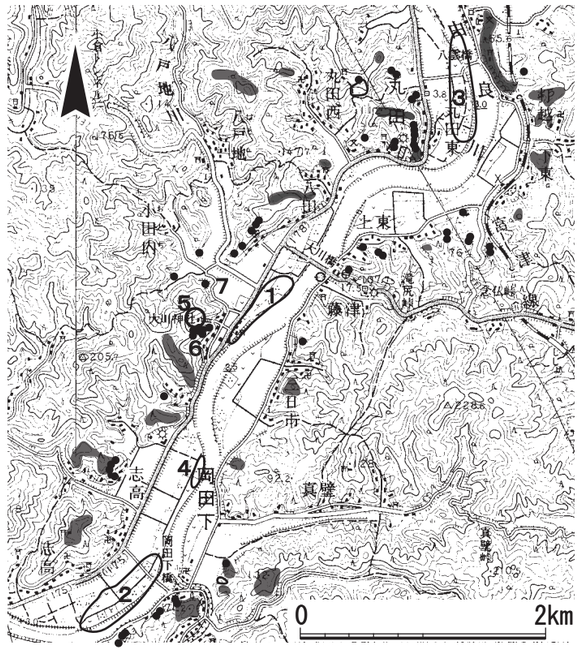
当遺跡では、昭和 61 年度に舞鶴市教育委員会によりほ場整備に伴う発掘調査がおこなわれ、平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物、古墳時代の溝や弥生時代の遺物包含層が確認されています。

今回の調査結果

調査対象地が総延長約 550mと広範囲で、A地区、B地区（B-１・２地区）、C地区に分けて調査を行っています。調査では、それぞれの時代の遺構面が 20cm から 30cm の砂に覆われており、地表下約３m（標高約１m）の間に４時期の遺構面が認められます。以下、各地区ごとに現在までの成果を報告します。

A地区

室町時代の遺構面では、掘立柱建物１棟と石組み遺構１基がみつかりました。石組み遺構は、１辺約１mのほぼ正方形で、そのうち北西と南西では面を揃えて石が置かれていました。石塔などの基礎と考えられます。



第１図　調査地位置図（国土地理院 1/50,000「舞鶴・大江山」）
1.大川遺跡　2.志高遺跡　3.八雲遺跡　4.花ノ木遺跡
5.大川神社　6.徹光山古墳群　7.宮ノ鼻古墳
●.古墳　●.中世山城

平安時代後期～鎌倉時代の遺構面では、掘立柱建物３棟とともに多くの柱穴がみつかりました。土坑 105 からは、完形品を含めて約 30 点の土師器皿や黒色土器椀などが集中して出土しました。祭祀に関わる遺構とみられます。その南側では、建物廃絶後の時期の鍛冶炉５基がみつかりました。現在、古墳時代の遺構面を調査しています。

B-1 地区

室町時代の遺構面では、土坑や石組み遺構１基がみつかりました。石組み遺構は一辺約１mの方形の範囲に石が集められていました。石を揃えて置いた部分が確認できることから、A地区の石組み遺構と同じく石塔などの基礎と考えます。

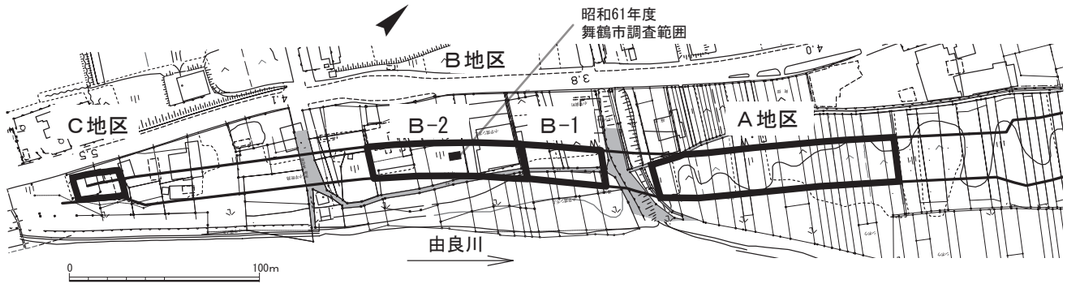
平安時代後期～鎌倉時代の遺構面では、掘立柱建物１～３や柵１～３、溝１～５がみつかりました。建物１は３間 ×３間、建物２は２間 ×２間の総柱の建物です。建物３は桁行３間、梁行は２間以上のものです。溝１・２は由良川に直交し、溝３～５は並行して掘られていました。宅地と宅地を区画する溝と推測されます。柱穴 170 では柱を抜きとった後に黒色土器が埋められていました。

B-2 地区

室町時代の遺構面では多数の杭跡がみつかりました。杭跡のいくつかは等間隔に並んでいることから、柵と判断されるものがあります。これらは由良川と直交しており、集落内の何らかの地割りを反映していると考えられます。現在、平安時代～鎌倉時代の遺構面を調査しています。

C地区

平安時代～鎌倉時代の遺構面で柱穴や杭跡を検出しました。建物を復原することはできませんでした。C地区は調査終了後に埋戻しを行いました。



第２図　大川遺跡調査地配置図

出土遺物

室町時代の遺物には、土師器皿や瓦器椀・鍋、中国製の青磁、東播磨産の須恵器、長崎産の石鍋、土錘などがあります。C地区から朝鮮半島で作られた象嵌青磁と 33 枚の宋銭がみつかりました。

平安時代後期～鎌倉時代の遺物には、土師器、黒色土器や瓦器の椀・皿、中国製の青磁・白磁などがあります。A地区では棹秤に用いる錘がみつかりました。

まとめ

平安時代後期～鎌倉時代　掘立柱建物が５棟以上みつかりました。建物の規模からは一般的な集落と考えられます。遺構や遺物からB地区周辺が中心地であったと推定されます。遺物には丹後地域で生産された土師器や黒色土器などのほか、東播磨地域の須恵器や長崎県の石鍋など他地域で生産されたもの、中国や朝鮮半島からの輸入品があります。中国製の青磁・白磁は 12 世紀代のものを中心に 100 点近くみつかっています。

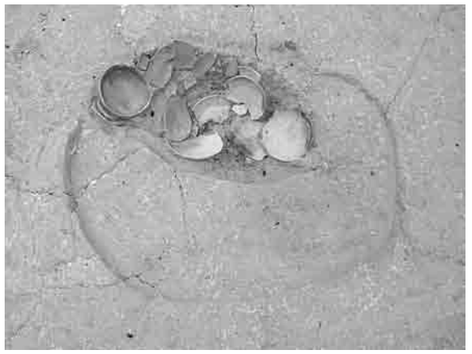
室町時代　杭跡を数多く検出していますが、建物はA地区で１棟のみを検出しました。室町時代の遺物も多数出土していることから、室町時代の居住域は平安時代後期～ 鎌倉時代と異なる位置にあったようです。これは、由良川の流れが時代と共に変化し、居住域もそれとともに移動したためと考えられます。

出土遺物から、平安時代後期から室町時代にかけての大川集落では、由良川の水運を利用して他地域との交流が活発に行われていたことが窺えます。と同時に、由良川 の流れが集落の立地を左右していたものと推測されます。このように今回の調査では自然堤防上の中世集落の移り変わりを明らかにすることができました。

用語解説

土錘（どすい）
　漁で使用する設置式の網に使われた錘（おもり）

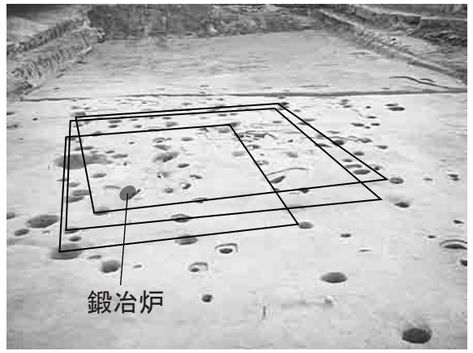
象嵌青磁（ぞうがんせいじ）
　朝鮮半島高麗時代(10～14世紀)の青磁の一種で、文様を刻んだり、押印した後、異なる色の土を入れ、文様をあらわしたもの。



Ａ地区　土坑105遺物出土状況（東から）
平安時代後期～鎌倉時代

Ａ地区　石組み遺構（南西から）
室町時代

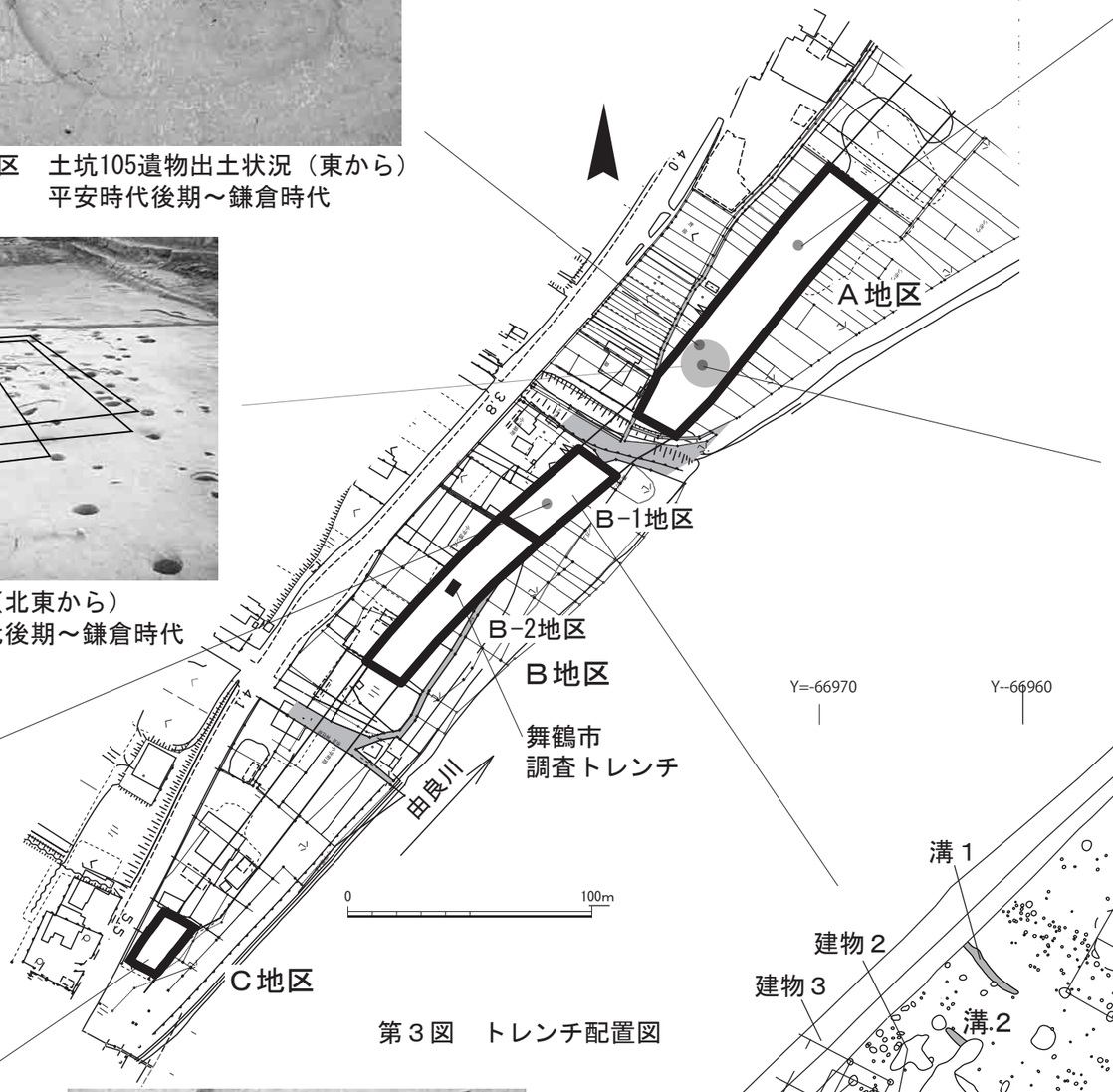
象嵌青磁（内面）



Ａ地区　柱穴群（北東から）
平安時代後期～鎌倉時代

Ａ地区　鍛冶炉跡（南東から）
平安時代後期～鎌倉時代

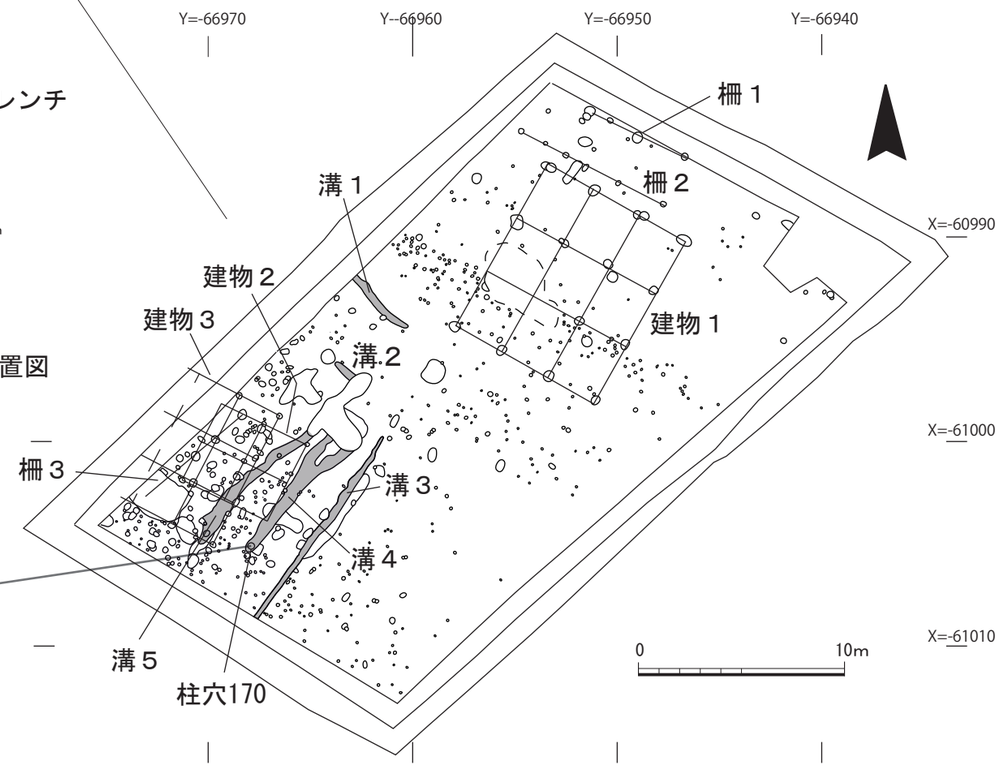
Ｂ-1地区　石組み遺構（北から）
室町時代



第３図　トレンチ配置図

Ｃ地区　全景（南西から）
平安時代後期～鎌倉時代

Ｂ-1地区　柱穴170遺物出土状況（南東から）
平安時代後期～鎌倉時代



第４図　Ｂ-1地区　平安時代後期～鎌倉時代平面図